

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01412

研究課題名（和文）北東アジア認識から見た19世紀末英米露政治思想の比較可能性に関する複合的研究

研究課題名（英文）Comparative study on the perception of Northeast Asia in Western political thought

研究代表者

竹中 浩（Takenaka, Yutaka）

奈良大学・社会学部・教授

研究者番号：00171661

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、欧米で政治的動揺が顕著に現れる19世紀末という時代において、北東アジアに対して欧米が持った基本的な見方を明らかにしつつ、主としてロシアに注目し、この国が、北東アジアとの関わりにおいて、西欧とは異なった自意識を持ちながら、先住民族にとっては他者でしかありえないという状況の中で、自らのアイデンティティを模索したことを確認した。またこの時代のロシア政治思想において、シベリアとアメリカの類比や、連邦制という新しい国家像への注目が見られることを明らかにし、政治と文化の複雑な関係が帝国の統合と解体後の歩みに及ぼす影響について、比較史的に検討するための視座を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、帝国統治における文化と政治の関係の分析を通じて、文化的な異質性は必ずしも民族間の政治的敵対をもたらさず、文化的な近さは政治的な親和性を保証しないことを明らかにした。この認識は、帝国から移行した政治秩序における民族問題を考える際にも当てはまるであろう。特に、ロシアと同様、領域内に異なった文化的特徴を有する民族を含む中国について考える際に役立つ視点を提供する。それゆえ本研究の成果は、比較史的研究の発展に資するのみでなく、文化と政治の複雑な関係が帝国解体後の歩みに及ぼす影響についての認識の深化につながるものであり、現代の国際政治を理解する上でも少なからず意味を持つはずである。

研究成果の概要（英文）：This research clarified the way in which Western countries viewed Northeast Asia and reflected their image of the region on external policies in the late nineteenth and early twentieth centuries. In this period, Western powers attached greater strategic importance to this region, though they gradually lost confidence in their own ability to exert civilizing influence. Their perception of the region had increasing significance in both political and intellectual aspects.

The main focus of this research is paid to the Russian Empire. Its political self-consciousness was unique and different from that of other Western powers, but Russia was too westernized to join the Northeast Asian region as its qualified and equal member. In this complex situation, Russian political thinkers searched for a new national identity with which to govern the vast territory. Analyzing their discussion, this research showed their contribution toward deeper historical understanding of empires in general.

研究分野：西洋政治思想史・比較政治

キーワード：北東アジア ロシア帝国 先住民 移民 シベリア地域主義 チベット仏教

1. 研究開始当初の背景

(1)帝国の時代において、当時満州と呼ばれた地域は、清朝を立てた満州族の出身地であり、清末まで漢族が入ることを禁じられていた。また、チベット高原からモンゴル高原にかけての空間は、ロシア帝国、イギリス帝国、中国の勢力圏が重なり合っていた。広域的な宗教であるチベット仏教を信じる人々が国境を跨いで居住しており、彼らの多くは遊牧民として移動する人々であった。これらを含む北東アジアは、さまざまな面で注目に値する地域である。

(2)北東アジアの住民とその文化に関する研究そのものはロシアでもわが国でも近年着実に進展している。しかしその多くは文化人類学的・民族学的なものであり、北東アジアに対する欧米の視線に注目した政治思想史のアプローチはそれほど見られない。特に、北東アジアと特に関係の深い英米とロシアの関わり方の違いに注目した研究はほとんどないと言ってよい。従来、北東アジアとの関係においては、ロシアと英米との政治的なかかわり方の違いが強調されるのみで、それぞれの知的世界の関わり方、思想的なアプローチの違いは十分明らかにされてこなかった。

ロシアと英米はその歴史のなかから異なった世界に対するアプローチを生み出し、北東アジア地域においてもそれを展開しようとしてきた。そのアプローチがどのように異なっていたのかは、政治思想の質の違いと深く関わっている。どちらとも無関係でいられない日本にとって、この問題を解明することの意義はますます大きくなっている。

2. 研究の目的

(1)19世紀末、シベリア鉄道の建設と、西欧文明を受け入れた日本の大陸進出は、以前にもまして欧米世界の関心を北東アジアに向けさせることになった。以来、今日にいたるまで、北東アジアを自らの世界と関係づけるために、欧米世界はさまざまな知的・政治的営為を積み重ねてきている。これについて比較史の立場から解明することは、すぐれて現代的な意義を有する課題である。本研究では、シベリア鉄道の建設が始まった1891年から、日本が中国に21か条の要求を突きつけた1915年までの25年間を主たる対象として、欧米諸国の中でも北東アジアと特に深い関わりをもつロシア及び英米の知的世界が、この地域のマイノリティをめぐる状況をどう捉えたかを解明し、それを通じて、西洋政治思想史という分野が、北東アジアの問題を見るためになしうる貢献の形を明らかにする。

(2)同時に、そこに現れてくる多様な思想的問題を包括的に扱うことのできる視点を設定し、偏狭な大ロシア・ナショナリズムによってマイノリティの同化が推し進められたという、ロシア帝国の民族政策に対する従来の一面的な理解を修正し、新たなロシア政治思想史研究の地平を切り開く。

3. 研究の方法

(1)本研究では、思想史のアプローチに行政史のアプローチを組み合わせた方法論を採用する。二つのアプローチによる交差的な分析によって、北東アジアの歴史をめぐる問題を立体的に浮かび上がらせる。ヨーロッパ以外の地域に対する眼差しはそれぞれの思想的立場をよく表して

いと考えられることから、まず、ロシア及び英米の政治思想を鏡として、それに映った満洲及びモンゴル高原を中心とした北東アジア像を、文明観及び宗教観に焦点を合わせて分析する。

(2)それと同時に、英米及びロシアの植民地統治・辺境統治の特徴的なスタイルに注目し、それを思想と絡めて性格付ける。特に力点を置くのはロシア帝国である。ロシアの辺境統治は、そのマイノリティに対する捉え方の思想的特質によってと同時に、北東アジアが帝国の連続した周縁に位置していることによって性格づけられる。この辺境統治の特徴を視野に入れることによって、ロシア及び英米と北東アジアとの関わりを立体的に理解する。

4. 研究成果

(1)2019年度の秋に『模索するロシア帝国 大いなる非西欧国家の一九世紀末』を刊行し、中国人研究者の協力を得て、その重要な部分を中国語で発表した。これは本研究の最大の成果である。この著書の中で、少数派の宗教に対する体制宗教の態度と政府の政策との関係、中国をはじめとする北東アジアに対する欧米の基本的な見方を明らかにし、西欧において政治的動揺が顕著に現れる19世紀末という時代において、北東アジアの問題が自国の認識に深く関わっていることを示した。特にロシアが、北東アジアと西欧の間であって、西欧とは異なった自意識を持ちながら、北東アジアの諸民族の間では他者でしかありえないという複雑な状況の中で自らのアイデンティティを模索したことを確認した。また、ロシア帝国における中国や朝鮮など東アジアからの移民と、ドゥホボールやモロカンなどの宗教移民に関するロシア及び英米の研究についての文献調査を記述に反映させた。

(2)ヨーロッパと東アジアのいずれとも深い関わりを持ち、双方を視野に入れることのできる存在としての日露の共通性に注目し、同時期に起こった大規模な歴史の変革である明治維新と大改革を対比することによって、ヨーロッパ及び東アジアと日露の関わりを特徴づけるとともに、欧米と中国との間にロシアと日本を位置づけるなど、問題をよりグローバルな視野に置いた。これは本研究の中心的なコンセプトに関わる作業であり、(1)の著書で行ったロシア帝国についての研究を、地方行政やナショナリズムの特徴、自国の政治体制の輸出可能性についての認識といった観点に立つ比較研究へと展開することの可能性を明らかにしている。中国研究への応用を強く意識したものであり、本研究を国際的な学術交流に結びつけていく上で意味があると考えている。

(3)帝政期のロシアは、中国やイギリスと競合する北東アジアの国際関係を有利に展開させるために、自らと中国の間にあるチベット仏教圏との関係を強めようとした。とりわけ自国内に住むブリアートを同化し、忠実な帝国臣民にすることに努めた。本研究では、東シベリアにおけるキリスト教宣教師の活動及びシベリア地域主義について、国内及び英米露に所蔵されている文献を広く調べ、それによって、広域的宗教であるチベット仏教とそれを信じるマイノリティに関する研究のための基礎を築いた。さらにイギリスにおいて、英米露清の知識人がこの地域と民族、特にチベット人及びモンゴル系の遊牧民に対して持った認識を知るのに役立つ文献について調査を行った。

(4)東シベリアのザバイカリエにおける正教宣教師の活動と、1860年代ロシアに現れた政治

的・思想的傾向としてのシベリア地域主義に注目して、イルクーツク大主教としてザバイカリエにおける宣教活動に力を注いだヴェニアミンと、歴史研究によってシベリア地域主義の形成に大きな貢献をしたシチャーポフを対比しつつ分析し、それによってそこで文明、人種、言語、宗教といったさまざまな要素がどのように関係しているかについて解明し、ブリヤート同化政策全体の基本的な構図を明らかにした。具体的には、ロシア正教の宣教活動においてチベット仏教に対する強い関心があること、またこの時代のロシア政治思想において、シベリアとアメリカの類比や、連邦制という新しい国家像への注目が見られることを明らかにした。これも本研究の重要な成果であるといえることができる。

(5)本研究が主たる対象とした北東アジアはロシア帝国の東部辺境に連なる地域であるが、さらに進んで、そこで得られた知見を、最近とみに関心が高まっている西部辺境及び中東欧地域の研究に応用することを試み、それによって、政治と文化の関係という観点から帝国統治の問題を比較史的に検討するための視座を得ることができた。

帝国は多くの文化的要素を抱え込む政治的まとまりであり、その中には将来国民国家へといった可能性を持つ「民族」が胚胎する。それらの「民族」の政治的成熟度はさまざまであり、それに応じて政府は各々に異なった処遇を与えることになる。広大な版図を持つロシア帝国は、著しく性格の異なった民族を内に抱え込んでいた。例えばブリヤートは、帝国の支配層から見て、文化的には明らかに異質でありながら、政治的には概して無害な人々であった。これに対して南西部辺境に住む「ウクライナ人」は、文化的には支配層と近似していながら、政治的には緊張を生じさせる可能性を持っていた。また、汎運動という、本来国民国家とは相容れない現象にも連なるものであった。

文化的な異質性は必ずしも民族間の政治的敵対をもたらさず、文化的な近さは政治的な親和性を保証しない。このことは、帝国統治における文化と政治の関係というテーマの本質に関わるものであり、ロシアと同様、領域内に異なった文化的特徴を有する民族を含む中国について考える際にも留意すべき点である。特にモンゴル人やチベット人と漢族の関係は、ロシア帝国の民族間関係と比較可能な側面を持っている。文化と政治の複雑な関係が帝国統合と帝国解体後の歩みに及ぼす影響についての比較史的検討は、本研究から派生するきわめて重要な研究課題である。本研究の成果を踏まえて、今後は帝国が抱える民族問題一般へと視野を広げていくことが可能であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹中 浩	4. 巻 第71巻
2. 論文標題 帝政期のザバイカリエにおけるブリヤートへの宣教活動 チベット仏教への対抗と総督府との関係を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 阪大法学	6. 最初と最後の頁 889 912頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹中 浩	4. 巻 104号
2. 論文標題 明治維新と大改革 比較の可能性と西欧	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロシア史研究	6. 最初と最後の頁 150 166頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹中 浩	4. 巻 69
2. 論文標題 ゴレムィキン内相期のロシアにおける地方自治の諸問題 ゼムストヴォをめぐる論争を手がかりとして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 阪大法学	6. 最初と最後の頁 1-32頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹中 浩
2. 発表標題 明治維新と大改革
3. 学会等名 ロシア史研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 竹中 浩	4. 発行年 2020年
2. 出版社 社会科学文献出版社	5. 総ページ数 645
3. 書名 現代中国変動と東亞新格局 第二輯	

1. 著者名 竹中 浩	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 274
3. 書名 模索するロシア帝国 大いなる非西欧国家の一九世紀末	

〔産業財産権〕

〔その他〕

特になし。

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------